

2020年2月20日／浪宏友ビジネス縁起観塾

## 苦悩と原因

### 1. 概要

#### (1) 資料

増谷文雄著『阿含經典2』（ちくま学芸文庫）／詩（偈）のある經典群／拘薩羅相應／02人、19世間、

#### (2) 主題

コーサラ国のパセーナディ王は、釈迦牟尼世尊に、苦悩の原因について尋ねました。このことについて、学んでみたいと思います。

### 2. 不利・苦悩・不安について

#### (1) 経文「人」

かようにわたしは聞いた。

ある時、世尊は、サーヴァアッティ（舎衛城）のジェータ（祇陀）林なるアナータピンディカ（給孤独）の園にましました。

その時、コーサラ（拘薩羅）国の王パセーナディ（波斯匿）は、世尊を訪れ、世尊を礼拝して、その傍らに坐した。

傍らに坐したコーサラ国の王パセーナディは、世尊に申しあげた。

「世尊よ、どのようなことが人の心のなかに生じて、人の不利と苦悩と不安とになるのでありましようか」（増谷文雄編訳『阿含經典2』ちくま学芸文庫、p. 387）

#### (2) 不利・苦悩・不安

##### ① 不利

「利」は「利益(りやく)」です。利益は、仏教では、自分の人格が成長し、人びとのために役立つことができるようになることです。「利益」と「功德」は、同じ意味です。

「不利」は、利益の否定ですから「利益がない」となります。自分の人格が成長せず、人びとのために役立つこともできないということになります。

##### ② 苦悩

苦悩について仏教では、「生・老・病・死」の四苦、これに「愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五陰盛苦」を加えた八苦などが説かれています。

また「嘆き、悲しみ、苦しみ、憂い、悩み」という定型句もあります。

### ③ 不安

「安」とは「軽安」で、身心が柔軟で軽やかで安定していることです。なにごとにもとらわれず状況に応じてしなやかに対応できます。中道・八正道を实践できる状態にあるわけです。

「不安」は、軽安の否定です。心身が重苦しく、不安定なことです。現象に振り回されて、中道・八正道を歩むことができません。

#### (3) 原因を心に求める

ここでは、パセーナティ王が、「どのようなことが人の心のなかに生じて、人の不利と苦悩と不安とになるのでありましようか」と問いかけています。

原因を「自分の心」に求めています。

#### (4) 原因を外に求める

多く人は、不利、苦悩、不安の原因を他人、世間、時代その他の外部の要因に求めますが、それは的外れなのです。

原因を外に求めている限り、不利、苦悩、不安をなくすことはできません。

## 3. 貪り・怒り・愚かさ

### (1) 経文「人」

「大王よ、それには三つのことがあって、それが人の心のなかに生じて、人の不利と苦悩と不安とになるのである。その三つとはなんであろうか。

大王よ、貪りは、人の心のなかに生じて、人の不利と苦悩と不安とになるのである。

大王よ、怒りは、人の心のなかに生じて、人の不利と苦悩と不安とになるのである。

大王よ、愚かさは、人の心のなかに生じて、人の不利と苦悩と不安とになるのである。

大王よ、これらの三つのことは、人の心のなかに生じて、人の不利と苦悩と不安とになるのである」

世尊はそういった。そして、かさねて偈を説いていった。

「貪りと怒りと愚かさ

この悪しき心おのれのうちに生じて

人はおのれを害するなり

たとえば、竹が実をもちて倒るるがごとし」(同書、p. 387~388)

### (2) 釈迦牟尼世尊の答え

釈迦牟尼世尊は、心の中に、貪り・怒り・愚かさのいずれが生じて、不利・苦悩・不安が生じるとお答えになりました。

### (3) 偈の意味

釈迦牟尼世尊は偈を説きました。

貪欲・瞋恚・愚痴という悪い心が自分の中に生じて、自分を害する。

それは、花が咲き実を実らせた竹が倒れてしまうようなものだ。

竹は、竹林ごと一斉に花を咲かせ、実を結んで、一斉に枯れてしまうことがあります。

これを、自分（竹）は、貪欲・瞋恚・愚痴（花）を生じて、自分を害する（倒れてしまう）と譬えたのでありましょう。

## 4. 貪り

### (1) さまざまな欲望

人間には、数多くの欲望があります。

生命維持のための欲望（食欲・睡眠欲など）

子孫を残すための欲望（性欲など）

生活のための欲望（金銭欲・財欲など）

成長・発展のための欲望（学習欲、研究欲など）

社会的欲望（名誉欲・権力欲など）

自己実現の欲望、その他

こうした欲望が正しく、健康的に発揮されれば、自分のため、人びとのため、社会のために意義あるはたらきをします。

### (2) 貪りの発生

欲望が満たされて快さを覚えますと、そこに執着が生じます。

欲望は執着によって肥大化し、ひずみを生じて、必要以上に求める、必要ないものを求める、求めてはならないものを求める、不正な方法で求めるなど、あらぬ方向にはたらきます。

肥大化したり、ひずんだりした欲望が「貪り」で、「渴愛」「貪欲」とも呼ばれます。

### (3) 貪りの作用

貪りの作用はさまざまです。次のような作用もあります。

- ① 貪りの満足を得ることを目的として行動し、「不利(人間的な成長ができない)」を生じます。
- ② 手に入れた満足を失う(愛別離苦)、自分の満足を邪魔するものに出会う(怨憎会苦)、満足を求めても得られない(求不得苦)など「苦悩」に満ちた毎日になります。
- ③ 貪りの対象に心を奪われ、振り回され、心身の落ち着くところがありません。このため「不安(心が重苦しく安定しない)」の毎日になります。

## 5. 怒り

### (1) 怒りの発生

貪りが満たされませんと、苦悩が生じます。苦悩が生じると、苦悩に対して怒りを生じます。また、苦悩の原因とみなした人やものごとに対して怒りを生じます。これを瞋恚と言います。

### (2) 怒りの程度や形

① 怒りは、不平・不満という比較的軽度のものから、激怒・憤怒と言われる激しいものまで、さまざまです。

② 仏教には、次のような怒りの形も説かれています。

忿(ふん)：相手から攻撃されたとき、その相手をやっつけてやろうと行動を起こします。

恨(こん)：相手から攻撃を受けると、それに対して怒りが生じ、その怒りがずっと続きます。

恨み、憎しみなどでありましょう。

惱(のう)：怒りを発し、荒々しい言葉で相手にかみつぎ、相手のいやがることを大声で言ったりします。これを「惱」というのは、悩ませることなのではないでしょうか。

害(がい)：怒りの心を起こし、相手を傷つけようとします。肉体的に傷つけるだけでなく、精神的に傷つけたり、社会的に傷つけたりします。

### (3) 怒りの性質

怒りは、怒りの対象であるものごとや人を否定し、破壊し、抹殺しようとしています。

また、怒りからは、建設的な精神は生まれません。

破壊する。建設しない。これが、怒りの性質であると言っていいでしょう。

## 6. 愚かさ

### (1) 愚かさとは

愚かさとは、智慧がないことです。阿含経では、四つの聖諦を理解することができず、八支の聖道を実践することができないことです。

### (2) 三つの愚かさ

愚かさの中でも、次の三つは、教えを学び実践する努力を妨げると言われています。

- ・自分本位の自我心を持つ。
- ・仏陀の教えに疑いや反感を持つ。
- ・誤った教えを信奉する。

### (3) 貪り・怒り・愚かさの相互関係

貪り・怒り・愚かさは、互いに互いを生み出し、また助長します。

これらを放置しておけば、迷いはどんどん深まっていきます。

#### 4. 世間における不利・苦悩・不安

##### (1) 経文「世間」

かようにわたしは聞いた。

ある時、コーサラ（拘薩羅）国の王パセーナディ（波斯匿）は、世尊を訪れ、世尊と丁寧な挨拶のことばを交して、その傍らに坐した。

傍らに坐したコーサラ国の王パセーナディは、世尊に申し上げた。

「世尊よ、いったい、どのようなことが世間に生ずれば、不利・苦悩・不安がおこってくるのでしょうか」（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p.432）

##### (2) 世間

経文「世間」は、前出の経文「人」とほぼ同じ文章になっていますが、「人」が「世間」に置き換わっています。

世間では、大勢の人びとが、それぞれの思いを抱き、それぞれの生活を営みながら、互いに関係しあって生きています。

私たちは、世間から離れて生活し、生きていくことはできないと言えるでしょう。

##### (3) 世間における不利・苦悩・不安

世間に生きる人々のそれぞれに、不利・苦悩・不安がおこり、それが集合して、世間としても不利・苦悩・不安がおこります。

その原因は何ですかと、パセーナディ王は、釈迦牟尼世尊に訊ねました。

#### 5. 世間における貪欲・瞋恚・愚痴

##### (1) 経文「世間」

「大王よ、三つのことが世間に生ずれば、不利・苦悩・不安がおこってくるのである。その三つとは何であろうか。

大王よ、貪欲が世間に生ずれば、不利・苦悩・不安がおこってくるのである。

大王よ、瞋恚が世間に生ずれば、不利・苦悩・不安がおこってくるのである。

大王よ、また、愚痴が生ずれば、不利・苦悩・不安がおこってくるのである。

大王よ、これらの三つのことが世間に生ずれば、不利・苦悩・不安がおこってくるのである」世尊はそのように説いた。そして、さらに重ねて、偈を説いて仰せられた。

「貪欲と瞋恚と愚痴と

この悪しき心、人に生じて人を害す

たとえば、かの竹のたぐいの

その実を生じて倒るるがごとし」（増谷文雄編訳『阿含経典』ちくま学芸文庫、p.432～433）

(2) 個人と世間

経文「人」によれば、世間に生きる人々が、それぞれに貪欲・瞋恚・愚痴をおこせば、それぞれの人に不利・苦悩・不安が生じます。

そのような人びとが世間に充満していれば、世間には貪欲・瞋恚・愚痴が満ち溢れ、不利・苦悩・不安が生じ続けることになるでしょう。

(3) 偈

ここでも、釈迦牟尼世尊は偈を説きました。

貪欲・瞋恚・愚痴という悪い心が人びとに生じて、人びとを害する。

それは、竹が実を実らせて、倒れてしまうようなものだ。

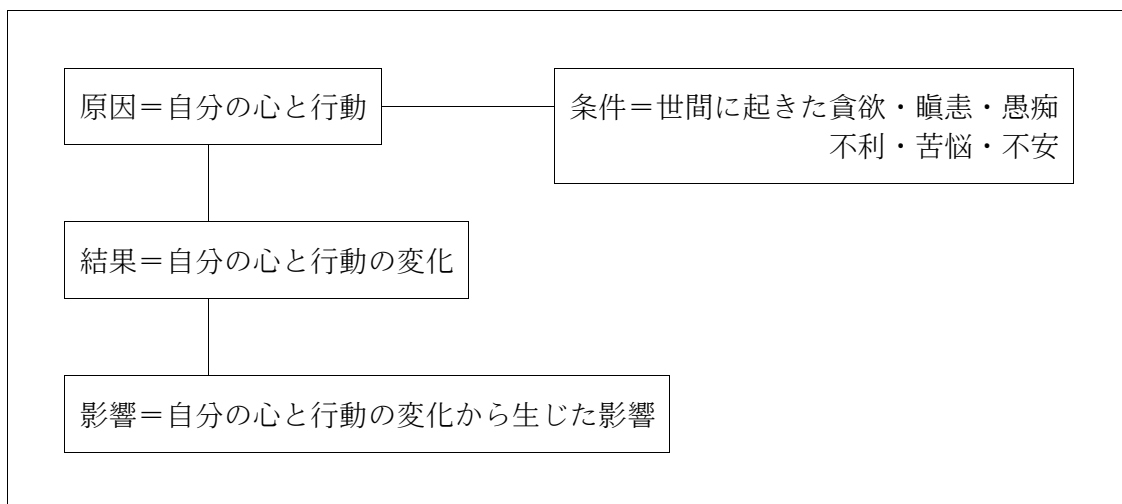
世間においては、誰かが貪欲・瞋恚・愚痴の心を起こせば、本人ばかりでなく、他の多くの人びとにも不利・苦悩・不安が生じるのです。

世間における人と人とのつながりは、このように深いものなのです。

(4) 自分のありかた

世間における貪欲・瞋恚・愚痴と、不利・苦悩・不安の影響が、自分に及んできたときは、どう対処すればいいのでしょうか。

原因・条件・結果・影響の原理によれば、次のように考えられます。



この原理から、世間がどうであろうとも、自分の持つ原因によって、結果・影響をコントロールできることが分かります。

自分の原因が、貪欲・瞋恚・愚痴であれば、結果・影響に、不利・苦悩・不安が生じます。

自分の原因が、八正道であれば、結果・影響は、利益・安穩・軽安となるでしょう。

ここから、自分の原因がしっかりしていれば、結果も影響も、良い方に向けることができることが分かります。